

日本沿岸捕鯨史研究のための覚書

—福本和夫『日本捕鯨史話』を中心に—

坪 井 雅 史

はじめに 一福本和夫『日本捕鯨史話』の特徴—

日本では、古くから鯨を食料として利用してきた。とはいえ、鯨漁によって鯨を捕らえていたとは限らない。多くは、流れ鯨や寄り鯨といった、偶然によって得た鯨を天の恵みとして頂く場合が主であった。こうした天恵としての鯨は、明治期になっても、日本各地に恵みをもたらし、その資金で神社や学校が造られたりしている。

今では、寄り鯨が流れ着いても、それを資源として利用することは原則的にはなくなっている。

こうした偶然の恵を待つ場合と、捕鯨による鯨の捕獲の中間的な形態として、浦に迷い込んだ比較的小型の鯨（イルカも含む）を、網を使って浦から出られなくして、捕獲するという原始的な捕鯨法が、各地で行われていた。この伝統は、現在和歌山県太地町で行われているイルカ追い込み漁に通じるものである。また、この捕鯨法は、近世に発達した日本独自の網捕り式捕鯨法を発案するきっかけであったとも考えられている。

舟を使って沖に出て、槍や鉋で突くことで鯨を捕獲する突き捕り式の捕鯨も、古くから日本各地で行われていたと考えられている。特に戦国期の武器の発達と海賊の活躍は、その後の組織的な鯨組による突き捕り捕鯨の

発達につながった。その後、上記の網捕り式捕鯨が考案され、日本の捕鯨業は飛躍的に拡大した。さらに近代になってから、いわゆるノルウェー式捕鯨砲や捕鯨銃を使った捕鯨方法、ならびに母船式の捕鯨が開発された。

こうした日本における捕鯨の歴史を、近世からのマニュファクチュアの発達史の一部として、しかも他国との比較を念頭に置きつつ、古くからの資料を丹念に紐解くことで明らかにしようとしたのが、福本和夫の『日本捕鯨史話』（1960年刊）である。

この研究ノートでは、主に福本のこの著作に基づき、日本沿岸捕鯨がどのように描かれてきたのかを書きとどめておきたい。それによって、日本人が鯨とどのように関わってきたのか、現在の鯨との関わり方との違いはどこにあるのか、またそれは他の国々の人びとの鯨との関わりとどのような共通点があり、どのように異なるのかを明らかにするための準備作業をしたい。

福本は『史話』執筆にあたって、多くの古くからの文献を参考にしているが、なかでも当時の渋沢水産史研究室の協力に負うところが大きかったと述べている。この渋沢水産史研究室は、渋沢敬三がこの本の跋文に書いている通り、日本常民文化研究所に併置されたものであった。現在では神奈川大学に移設されているこの常民文化研究所が、わが国の庶民文化研究に資する様々な資料を擁していることは周知のことであるが、捕鯨関連の資料についても同様であることがうかがわれる。

本題に入る前に『史話』の特徴について簡単に確認しておく、その最大の特徴は、古くからの日本の文献に現れた捕鯨のみならず、鯨に関連する多くの絵巻などをも詳細に調べ上げることで、その特徴を比較した上で分類し、わかりやすく紹介している点にあると言えよう。したがってこの小論では、それらのうち捕鯨に関するものに限り、簡単に紹介しておきたい。

また、福本は、『史話』の目的について、次のように述べている。

「捕鯨部門について、その実情と実態の由って来たる所を、前代から中世古代にまでさかのぼってたずね、日本式捕鯨法発達の経過と伝統を明らかにすると共に、それが幕末から明治の三十年代にかけて欧米式捕鯨法の採用へ移りかわる過渡期のジグザグな顛末を究めつくし、それをわかりやすく説きあかすことに焦点をおいたのが本書である(vi)」。

そして、『史話』を「一貫する著者独自の研究の立場」は、「日本ルネッサンスとマニファクチュア（手工業工場）の見地からした総合・比較研究（269）」であると述べている。ここには、ルネッサンスとマニファクチュアの見地からの研究が、「従来の日本経済史家に欠如していた（269）」ことへの批判が込められているようであるが、この点についてはコメントを差し控える。後半の「総合・比較研究」の意味は、従来、日本各地の地域ごとの捕鯨研究はあっても、「体系的な日本捕鯨史ではなかった（270）」ことに対して、各地の捕鯨史を総合・比較している点を特徴としていることにある。さらには、日本だけでなく、「欧米の捕鯨、中国の捕鯨、アイヌ人の捕鯨との比較をこころみた（270）」こともその特徴である。

実際、日本近海の欧米の捕鯨船の様子が、当時の欧米捕鯨船と日本の漂流船との接触などの研究を通して明らかにされているのはいへん興味深い点と言える。その中では、1824年、水戸沖で操業していた英国捕鯨船に近づき視察した漁夫忠五郎の紹介や、1841年、アメリカの捕鯨船に救われた土佐の万次郎のことなどが紹介されており、それを通して、当時の英米の捕鯨船の規模や捕鯨方法、鯨体処理作業の様子などが描かれている。

ちなみに、万次郎は、「日本でアメリカ式捕鯨を実地に試みた最初の人

(32)」としても紹介されているが、アメリカのボンブランズ式の捕鯨法をはじめて導入した小笠原諸島付近でのこの試みは、「発展をみないでしまった (32)」とされる。

1. 日本における捕鯨方法の発展段階

さていよいよ日本の捕鯨史について述べていくが、福本は「日本捕鯨方法発展の五段階 (33)」を以下のようにまとめている。

第一段階（古く～1600 年頃）

弓取り法の段階

…弓または原始的な網を使った捕鯨法。丹後の伊根湾で行われた、偶然湾に入った鯨を湾から出られなくするために楯切網を使った捕鯨が行われていたとされる。他にも流れ鯨や寄り鯨を描いた記録が紹介されている。例えば、1798 年、品川に流れ着いた鯨を描いた馬琴の「燕石雑誌」などである。

また、福本自身それを実証できる資料はないと認めているが、古代の弓取り法の存在は現在では否定されている。

第二段階（1600 年頃～1675 年頃）

（鉾による）突き捕り法の段階

…鉾で突いて取る捕鯨方法。1606 年、紀州太地浦で和田忠兵衛頼元が組織的な捕鯨業をはじめたとされる。それに先立つ先駆的な捕鯨法とされるのは、1570 年頃から三河や尾張で行われていた鉾で鯨を突く新しい捕鯨法であったとされる。

第三段階（1675 年頃～1894 年頃）

（鉾と網を併用する）網捕り法の段階

…鯨を海に広げた網の中に追い込み、動きを鈍らせ、鉈で突いて取る捕鯨法。この方法は、太地から土佐の室戸や九州の大村に伝わり、日本各地における一般的な捕鯨法となった。その後西洋式の方法が採用されるまで、200 年以上に亘って続けられた「日本式捕鯨法の最も発達した形態 (35)」とされる。これには、上記の伊根湾での盾切網の使用や同じく伊根湾で行われていたという鰺追い込み漁が、その発想のヒントとなったとされる。また、舷側をたたくことで鯨を網に追い込む方法は、現在のイルカ追い込み漁に通じるものであり、以前から鯨の追い込みは行われていたと言える。

ただし、房州勝山の醍醐組では、小型のツチ鯨を対象としたため、ずっと突き捕り法による捕鯨が続けられた。また、太地でも、漁間期にはゴンドウなどの小型鯨類を対象とした突き捕り法や追い込みによる捕鯨が行われていたと思われる。

第四段階（1894 年頃～1899 年）

鉈とポンプランスを併用して捕鯨し、母船上で油をとる米国式捕鯨法の段階

…ポンプランスとは、槍を捕鯨銃から打ち込むもので、鉈によって鯨を弱らせた後、最後のとどめを刺すための道具と言える。それまでは剣または槍を用いていたところを、ポンプランスに代えたということである。

第五段階（1899 年～現在）

ノルウェー式捕鯨砲による捕鯨と母船上で鯨の処理を行う捕鯨工船採用の段階

…日本遠洋漁業会社が、はじめて遠洋捕鯨に乗り出したときにはじまるが、鯨体処理を母船上ではじめたのは、南極捕鯨に進出するにいたってからである。

福本も認めているように、実際のところ、上記第四段階の捕鯨はほとんど行われていない。また、母船を中心とした捕鯨船団を形成し、遠洋で捕鯨をするようになるのは、ノルウェー式捕鯨砲が用いられるようになるのとは必ずしも連動していない。その理由は、英米の捕鯨が鯨油の採取を目的とし、鯨油以外を捨てて捕鯨を続けることができたのに対して、日本の捕鯨は、鯨肉の獲得をも目的としていたため、鯨肉を船上で保存できる技術が開発されるまでは、鯨体を陸上で処理することが不可欠であったためと考えられる。

福本は「日本の捕鯨方法は、ヨーロッパやアメリカのそれとちがいで、そのもっとも発達した時でも、幕府の鎖国政策と大船製造の禁止やあらゆる発明の弾圧などに制せられて、まったくの沿岸捕鯨と鯨体の陸上処理とに終始したところに、その得失・長短両面の特色が見られるのである(vi-vii)」とも述べている。しかし、日本の捕鯨と、近世の欧米の捕鯨との最大の違いは、鯨油獲得のみを目的とするのか、鯨の肉や内蔵、骨、髭などあらゆる部位の利用を目的とするのかによると考えるべきではなかろうか。

江戸末期に日本近海に押し寄せた欧米の捕鯨船は、捕鯨により、大量の鯨油を積んで2~4年余りの漁の後に帰港した。こうした捕鯨が可能だったのは、鯨肉も含め鯨油以外を捨てることによってであったと考えられる。日本では、ノルウェー式捕鯨砲が利用されるようになった後でも、しばらくは沿岸捕鯨を中心とする捕鯨が行われ、陸上で鯨体処理が行われた。それは、当時の船の大きさや鯨肉の保存技術を考えると、鯨体を船上で解体・処理し船上に保管するよりは、陸上で処理し、消費地へ輸送した方が効率的であったからだと考えられるのである。

福本自身も、『史話』第十章で記しているように、大型鯨類を対象とした沿岸捕鯨だけでなく、小型鯨類を対象とした沿岸捕鯨も、特に戦後に

なって盛んに行われた。そこでは、ミンク船や天渡船と呼ばれる 10 トン程の小型船を用いて、ノルウェー式捕鯨砲や前田式五連装銃を用いた捕鯨が行われていた。福本は初版出版時には、この小型鯨類を対象とした捕鯨に用いられる五連銃を前田式銃ではなく、ノルウェー式捕鯨砲の一種と考えていたようだが、その形は大砲のような捕鯨砲とはずいぶん異なるものである。初版執筆時、この前田式捕鯨銃をポンプランス同様、鋸ではなく槍を撃つものと考えていたようだが（215）、新装版ではその誤りについて述べている（279）。

こうした経緯をふまえると、上記の第四段階を、ノルウェー式捕鯨砲または前田式捕鯨銃を用いた捕鯨法による沿岸捕鯨に改め、第五段階を、冷凍船などの開発をともなった母船を中心とした捕鯨船団方式による遠洋捕鯨の段階とする方が適当ではないかと思われるのである。

ちなみに、『史話』の冒頭には、「沿岸各地に散在する捕鯨砲一門を船首に据えつけた小型捕鯨船の地味な活躍と、その基地としての沿岸陸上の鯨体処理工場のことは、その規模余りにちいさく、その数余りに多いせいか、かえって注意されていないのが、わが捕鯨業こんにちの実情であり、実態である（vi）」と述べているが、『史話』が書かれた 1960 年頃の沿岸捕鯨は、当然ではあるが、現在と比べれば遥かに大きな規模で行われていた。

現在の小型沿岸捕鯨は、IWC の規制枠外にあるツチ鯨やコンドウ鯨類、イルカ類といった小型鯨類（ミンク鯨を除く）に限られており、その数は岩手県や三重県でイルカ類を中心に 1000 頭程度となっている。小型鯨類の中では比較的大型のツチ鯨を捕っている千葉県和田浦での 2016 年の捕獲枠は 24 頭である。それに対し、1960 頃の沿岸捕鯨の対象であった大型のマッコウ鯨の捕獲枠だけでも、日本全体で 2000 頭前後であり、鯨の大きさや他の鯨類の捕獲をも考え合わせれば、その規模の違いは圧倒的なものと言えよう。

こうした状況において、日本に限らず、人類の捕鯨方法の今後の発展は、全く望み薄な状況にある。一つの可能性としては、セミ鯨やマッコウ鯨のように殺しても沈まない鯨を対象にして、それを一撃で殺す技術については、今後発展の余地があるかもしれない。現在の捕鯨法が抱える動物倫理上の問題として、鯨に痛みを与えることなく殺すことができない点が挙げられる。ノルウェー式捕鯨砲でも一撃で鯨が死に至る場合もあるが、即死というわけではないし、また一撃で殺すことも容易ではないからである。

網取り式捕鯨などの鉾を打ち込む昔の方法では、鯨が徐々に弱りほとんど動けなくなったところで剣や槍でとどめを刺すやり方であったため、鯨が死に至るまでには長い時間がかかり、それだけ鯨を苦しませていたことになる。それに比べれば、現在の捕鯨法は、動物倫理的観点からもかなり発展した段階にあるとは言える。とはいえ、他の動物の屠畜方法と比べれば、その方法の開発には困難が伴う。

現在太地で行われている小型鯨類の追い込み漁も、一時期、反捕鯨団体にイルカの殺し方が残酷であると批判された。しかし現在では、鯨やイルカを苦しめずに殺す方法に改められており、捕鯨方法の新たな発展とも言える。これを大型鯨類に応用することは難しいが、現在でも行われている小型鯨類を対象にした昔ながらの突き捕り法による捕鯨は、むしろこうしたやり方に改められるべきなのかもしれない。

2. 網取り式捕鯨の特徴と規模

福本は、網取り式捕鯨の特徴について、六つの点を指摘しているが、現在でもあまり知られていない2点に絞って、紹介しておこう。

一つは鉾の投げ方である。鉾は鯨に対して「すぐに突き出して刺すのではないのはもちろん、一直線に投げつけるのでもなく、一旦空高く投げ上げ

て、鯨体に真直ぐに一その落下するいきおいで、つよく突きささるようになげつけるのである（86）。より鯨に近い場所から、直接銛を投げつける欧米式の投げ方との違いが強調されている。

もう一つは、網の使い方である。「網取法では、鯨を包囲しながら、網まで追い立ててくるために、狩棒で舷をたたく（88）」。また、鯨によって、この音への反応の仕方が違うことまで当時から知られていたことなども紹介されている（66）。

この鯨の追い込みについては、既に述べた通り、現在の小型鯨類の追い込み漁につながるものであるが、近年になってははじめられたものではなく、網捕り式捕鯨が盛んであったころにも、漁間期には小型鯨類を対象にして日常的に行われていたのではないかと推測されている（関口）。

次に、網捕り式捕鯨の規模である。もちろん地域や年代によって様々ではあるが、おおよそどの程度のものであったかについて、次のように述べられている。

船舶総数二十艘乃至四十艘、最も多いのは五十艘に近く、総従業員数陸上、海上、定抱（じょうがかえ）、日雇併せて、総数五百人乃至八百人を擁する極めて大規模なマニユファクチュアであって、漁夫、事務員のほか、大工（これに船大工と網大工があり）桶屋、鍛冶屋、左官等いわゆる前細工の諸作業に関係ある職人を定抱えしているのは勿論、あるいは酒倉を建てて、日用の酒を造らせ、または内科外科の医者、才芸の食客さえ招き集めている組もあった。（90）

網捕法の初期の規模と比べると、「網取法開始の当初の勢子船はせいぜい十艘内外のものであったように思われる。それが、後年文政天保の頃になると、生月島の益富組など実に勢子船二十艘を数え、太地浦でも十六艘

に増加している（92）」という。これを象徴するように、太地浦の戸数も網捕り式が始まる直前の1670年前後の130戸ほどから、1680年代中頃の二十年ほどの間に470戸程へと増加している（94）という。網捕り法によって、捕鯨の規模が大幅に拡大し、一大産業になっていったことが示されている。

では、実際どれほどの鯨が捕れていたのか。年代によっても地域によっても異なり、また断片的な数字しか残っていないとされるなか、一貫しない部分もあるようだが、おおよそのところ次のような数字となる。

太地では、年平均40～50頭、九州の肥前から平戸・壱岐あたりの広い範囲に多くの鯨組があったが、それぞれの組でおおよそ30～40頭、全体では300頭程が捕れていた。土佐では、年平均30頭ほどであった。その他を合わせると、日本沿岸でおおよそ400～500頭が捕られていたのではなかろうか。

ちなみに、幕末に太平洋で操業したアメリカの捕鯨船は、1820年～1865年の間に、平均100隻あったといわれるが（198）、それぞれが年に30頭ほどを捕獲していたという（138）から、年平均で3000頭の鯨が捕獲されていた計算になる。

さらに、近代になるとその数は飛躍的に増えることになる。日本沿岸で捕れる大型鯨類の数としては、1955年に2383頭とされている。南氷洋や小笠原近海、北洋といった遠洋での母船式遠洋捕鯨では、1万頭ほどが捕獲されていた（228-242）とされる。

こうしてみると、多くの大型鯨類が絶滅の危機にさらされたのも無理からぬところである。日本沿岸で大型鯨類の捕鯨を再開しようとすれば、鯨体数の回復を待ってのことではあるが、国家的な厳格な管理の下に実施しなければならないのは当然のことと言えよう。

3. 近世の捕鯨関連文献について

福本は、江戸時代以後の絵巻を含む多くの文献に現れた鯨や捕鯨に関する記述や絵を詳しく分析し紹介している。ここでは、鯨体処理を含んだ捕鯨関連のものを中心に簡単に紹介する。

まず、井原西鶴を「捕鯨のことに、特殊の関心を寄せて、これを記録した最初期の人々として、まず第一番にあげねばならぬ人物」とし、「太地浦の網取捕鯨業について、くわしく文章にしるした最初のものは、貞享五年（1688年）井原西鶴の『日本永代蔵』をもって、おそらく嚆矢とする（67）」と述べている。そこでは「太地浦の鯨組が大富裕者となった次第を伝えている（68）」と、1675年に網取り捕鯨がはじめられて十年ほどの後に、既に捕鯨が一大産業となっていたことを取り上げている。

次に、「医家として、もっともよくまとまったすぐれた最初の記録者（69）」とされる小野必大の『本朝食鑑』（1692）をあげている。これは「鯨および鯨捕りについて、最初の一番くわしい記述としてあげられるべき（256）」書とされ、図解こそないが、「鯨の医薬としての用法等にいたっては、もとより『本朝食鑑』のもっとも得意とする独壇場である」とされている。

『食鑑』は、17世紀の食物本草の決定版とも言われるが、日本独自の本草学の草分けともなった『大和本草』（1708）を書いた貝原益軒も、本草家として「捕鯨のことに簡単ながらふれている（69）」と紹介されている。

森田勝昭『鯨と捕鯨の文化史』によれば、捕鯨に関する記述は、本草学の中ではじめて「エピソードではなく独立したトピックスとして積極的に取り上げられ（210）」るようになったとされる。もちろん本草学の中で鯨というテーマが占めるのはほんの一部分に過ぎず、捕鯨の専門書が現れるのは、もう少し後になってからとなる。

さて、『史話』にもどると、次に物産図絵として、物産学者平瀬徹斎著、浮世絵師長谷川光信画の『日本山海名物図絵』（1754）があげられている。この第五巻に熊野浦の捕鯨の様子が、簡単な解説と共に描かれている。したがって、図解入りの文献としては、これがもっとも古い網取り式捕鯨の文献と言えよう。なお本書は、国立国会図書館デジタルライブラリーに所蔵されているため、パソコン上ですぐに関連できる（デジタルライブラリーに所蔵され公開されている図説は、下記の年代順文献一覧に☆をつけて表した）。近年の研究では、この『図絵』は、のちに木崎悠軒の『小児の弄鯨一件の巻』に影響を与えたとされている。（森・宮崎参照）

「一般の捕鯨史家が、まっさきにあげる（71）」書として紹介されているのが、山瀬春政の『鯨志』（1760）である。これには、捕鯨そのものの絵はないものの、鯨の種類毎の絵入りの説明が付されている。福本曰く「捕鯨図説ではなくて、鯨類図説に過ぎない（164）」。

「捕鯨絵巻のうちで、最初のもっともまとまった注目すべき作品（70）」として紹介されているのが、肥前唐津の木崎悠軒「肥前小川島絵巻」（『小児の弄鯨一件の巻』が正式な書名で、国立国会図書館デジタルライブラリーでは、この書名で検索できる）（1773）である。これには、捕鯨の様子だけでなく、鯨の解剖された各部位や捕鯨具が図入りで説明されているが、鯨体処理の様子は描かれていない。「ほんとの捕鯨絵巻は、これをもって嚆矢とするといって過言でないほどに、木崎絵巻は劃期的な新機軸の展開であった（165）」とされる。また、大槻清準の『鯨史稿』は、多くをこの書に負っていると言われる。

この木崎「小川島絵巻」を元に、鯨の解体の様子などが付け加えられて、後に生島仁左衛門による「小川嶋捕鯨絵巻」（一般に『鯨絵巻』と呼ばれている）（1796 頃）が作られることとなる。さらには、「平戸藩が生月島の捕鯨業者の益富又左衛門と共同で作った、平戸藩の出版物（森・宮崎、

141)』『勇魚取絵詞』(1832)へと受け継がれるのである。福本は、この『鯨絵巻』と『絵詞』とを、「数多いわが捕鯨図説の双璧とみなす(169)」と述べているが、たしかに両者の図版にはカラーのものも含まれ、詳細かつ鮮やかに、捕鯨の様子とその後の鯨体処理の様子が描かれている。

時代は戻るが、木崎「小川島絵巻」の後、司馬江漢の「生月島捕鯨見聞図説」(『西遊旅譚』第5巻)(1794)があげられ、「単に捕鯨の実況のみでなく、あわせて精細に、鯨体処理工場、すなわち鯨組のマニュファクチュアの内部組織ならびに作業を、はじめて図説したところに劃期的な特色がある(70)」とされている。これには江漢が「仙台の蘭学者にして医家であった大槻磬水のすすめにより、生月島に渡って、一ヶ月にわたり、したしく益富組の捕鯨業を見聞して、くわしく記録したばかりでなく、油絵をかき絵巻をかいりまで(70)」した結果、当時、江戸にいた蘭学者などには知り得ない貴重な現場の様子が描かれたのであった。鯨体処理の様子が描かれたのは、この書が最初と言えよう。上述の『勇魚取絵詞』の「大納屋の図」と『西遊旅譚』の「肉納屋乃図」には構図の取り方が類似しているとの指摘は、森・宮崎(143)にも見られるが、たしかに影響を受けているように思われる。

上述の生島仁左衛門は、肥前小川島の鯨組主であり、日頃見慣れた捕鯨・鯨体処理ならびに鯨の解剖図などを現場の目で詳細に描いている。

その後、大槻清準『鯨史稿』(1808)は、「捕鯨史書中の劃期的名著(165)」とされているが、彼も生月島に渡り、益富家に客として滞在し、「その捕鯨業の盛大を目撃(178)」したのであった。

上記の文献を年代別にならべれば次のようになる。

1688：井原西鶴『日本永代蔵』…太地の網取り式捕鯨の繁栄の様子

1692：小野必大『本朝食鑑』…「鯨のことをよく研究した最も古いもの
(256)」

1708：貝原益軒『大和本草』

1720：谷村友三『西海鯨鯢記』…後述

1754：平瀬徹斎著、浮世絵師長谷川光信画『日本山海名物図絵』☆
…最も古い網取り式捕鯨の図 → 木崎悠軒『小児の弄鯨一件の巻』
に影響

1760：山瀬春政『鯨志』(☆)…「捕鯨図説ではなくて、鯨類図説に過ぎ
ない (164)」

1773：木崎悠軒『小児の弄鯨一件の巻』☆
→「捕鯨図説の双璧」= 生島『鯨絵巻』、『勇魚取絵詞』に受け継が
れる

1794：司馬江漢『西遊旅譚』☆
…はじめて鯨体処理を詳しく図説した →『勇魚取絵詞』に影響

1796：生島仁左衛門『鯨絵巻』

1808：大槻清準『鯨史稿』
…多くを木崎『小児の弄鯨一件の巻』に負う。「捕鯨史書中の劃期
的名著 (165)」

1829：益富組『勇魚取絵詞』☆
(☆を付けた図説は国立国会図書館デジタルライブラリーで公開され
ている。なお、(☆)は、特定の図書館の PC でのみ閲覧できる。)

上記のうち、『西海鯨鯢記』は福本の本では紹介されていないが、『史
話』出版後の1975年に再発見されたものとされ(森田 217)、福本には参
照できなかった文献となる。この著者谷村友三は、自身が鯨組の経営者で
あり、「全編が直接的な観察情報で埋め尽くされている(森田 217)」。ま

た、鯨の分類や解剖学的説明だけでなく、「捕鯨の起源から始まって、突き捕り式捕鯨の登場とその技術伝播、網取り式捕鯨の開発とその技術の広がり」が詳しく述べられている（森田 221）」とされるので、福本がこの文献を参照できていたら、必ずや大きく紹介していたに違いないと思われる。

また、福本もその存在を指摘してはいたものの、内容を紹介できないでいた『鯨記』という「捕鯨史に関する最古の著作とされてきた（森田 222）」文献は、『鯨鯢記』の写本であったとされている。

おわりに

『史話』には、近代以降の日本の沿岸捕鯨だけではなく、遠洋捕鯨についてもふれられている。特に網取り式捕鯨からノルウェー式捕鯨への移行については、ノルウェー式捕鯨砲を導入したロシア捕鯨船による日本海での捕鯨の影響にもふれるなど、ある程度詳しく紹介されている。

しかし、近代の沿岸捕鯨の歴史については、近藤勲の『日本沿岸捕鯨の興亡』（2001）など多くの文献が現れているため、ここでは取り上げないことにする。また『史話』の出版された1960年以降の捕鯨の歴史に関していえば、現在まで続くIWCを舞台にした捕鯨反対派と賛成派の国々との間の激しい争いを巡って、多くの文献が出版されている。これらの分析については、今後の研究課題としなければならない。

IWCの捕鯨モラトリアムは、遠洋捕鯨だけではなく、日本で古くから行われてきた沿岸捕鯨にも大きな影響を及ぼしている。したがって、そのことが持つ意味を考えるためにも、まずは網取り式捕鯨という大規模な捕鯨産業を発達させた日本独自の捕鯨の実態、ならびに捕鯨が日本人の生活に与えた影響を知っておくことが不可欠である。その点で、福本の『史話』には様々な話題が網羅的に紹介されており、たいへん参考になった。

記して紹介した理由である。

【註および参考文献】

福本和夫、『日本捕鯨史話』法政大学出版会、新装版 1978 年（初版 1960）（新装版には、「追補 生月島の勇魚取絵詞と露伴の小説いさなとり」が追加されている。）なお、この小論の引用で、頁数のみ記載している場合は、本書からの引用である。

関口雄祐、『イルカを食べちゃダメですか？—科学者の追い込み漁体験記』光文社新書、2010

森田勝昭、『鯨と捕鯨の文化史』名古屋大学出版会、1994

森弘子・宮崎克則、「西海捕鯨絵巻の特徴—紀州地方の捕鯨絵巻との比較から—」（西南学院 国際文化論集 第 26 巻 2 号）、117～155 頁、2012